
夢見姫 墮落の少女

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見姫 墮落の少女

【Zコード】

Z3721C

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

あの日から永遠と眠り続ける少女と夢に潜る力をもつ少女が出会う時、運命は優しく残酷に廻り始める。

序章～哀愁～

序章～哀愁～

「私が世界を捨てたんじゃない・・・世界が私を捨てたのよ・・・」

少女は道を見失っていた。完全に・・・暗闇はどこまでも続く。一步、足を踏み出したところで目が覚めた。頬には涙が伝っていた。もう一度寝ようかと目を瞑る。しかし、母に早く起きろと急かされた。毎日の光景。傍から見れば、微笑ましいとか言う人もいるかもしない。しかし、少女にとって毎日とは退屈の繰り返しであり、それ以上、それ以下でもない。ただ、ひたすらに退屈なのだ。いつものように通学路を通り、登校し、いつものように教室に入り席に座る。「おはよう。」などと声をかけてくれる友達は誰もいない。時々、言つてくれる人もいるが、それは気が向いたから言つていい、ただ、それだけの事。しかし、これも少女にとってはいつも・・・退屈な光景なのだ・・・。

（第1夜 空蝉）

少女・・・歌夜は、そんなに明るい子ではなかつた。かといつて暗いわけではない。周りから特別、無視されているとか、いじめられているとか、そういうことは一切無かつた。しかし歌夜は誰とも口を聞かず、一人、席に座つたままだつた。

せめて、このクラスで仲の良い子が来るまでは・・・

と、思いながら退屈な時を一秒刻みで過ごしていた。

歌夜は高校一年生である。入学して間もない頃は、今より明るく振舞つた。中学校時代の自分を変え新しい高校生活を始めたいと思つたのだ。そのため級長も引き受けたりした・・・が、それは無駄な努力でしかなかつた。歌夜は人と接することに慣れておらず、周りの話題にもついていけなかつたのだ。流行には、さして興味が無く、服装や立ち振る舞いもしつかりしており校則は絶対に破らない、広い意味での、今時の子、から少し離れた存在・・・そんな子だつた。歌夜は初めてのうち、周りの人と仲良くなりたいと思つて行動していつたが、今は違う。周りの人間など興味が無く疎ましいとさえ思つていた。しかし、その反面では本当の友達を求めている。自分の中で多くの感情が交錯する・・・歌夜にはどれが自分の本心なのか分からなくなつていた・・・。

昼休み。歌夜にとつて一番退屈な時間である。仲の良い子がいるグループでいつも食事をとるのだが、その時も誰とも話さず、一人黙々と食べている状態・・・つまり一人で居ても変わらない状態なのだ。歌夜はそんな状態が嫌だつたが、「一人よろまし」と自分に言い聞かせ、この状況に半年近く耐えてきた。これからもずっとこれ

が続く・・・はずだつた。

「詩乃、一緒にお昼食べよ。」

いつもどおりの科白。友達・・・詩乃の答えは決まつてゐるはずだつた。しかし・・・

「「めんね。今田は、食堂で階で食べるの。」

詩乃是財布を取り、急いで教室から出て行つた。歌夜は一人、教室に取り残された。歌夜は詩乃のいつた何気ない一言が、自分の中で、怒り、悲しみ、といった感情に変化していくを感じていた。

‘皆’の中に私は含まれていないので・・・？一緒にいたのに・・・？

涙が頬を伝つ。

皆にとつての私の存在つて・・・一体・・・？居ても居なくとも・・・

それ以上は考えくなかった。色々な不満から叫び声をあげそうになつた。

そうなる前に・・・

歌夜は涙を拭い、鞄を持って教室を飛び出した。

（第2夜 彼岸）

家に着いた時、家には誰も居なかつた。

もちろん人が誰も居ないなという意味もあるが、彼女の心の内を聞いてくれる人が誰もいないという意味もある。

両親に自分の気持ちを素直に話してみても

「あなただけが、そんな悩みを持つているんじゃないの。みんな一緒なの。」

の一言で片付けられてしまうのが落ちなのだ。歌夜はこの言葉を聞くのが一番嫌いだった。

同じ悩みであつても一人一人感じ方は違う…！

心中では、そう叫んでいたが、口に出せるはずもなく、出かかった言葉を心の奥底に沈める。

するとそれが、やり場の無い不快な気持ちとなり、心に募る。

歌夜にとつて親に助言を求めるなど、悪循環のきづかけでしかなかつた。

歌夜は自分の部屋に入り鍵を閉めた。机の傍に鞄を掛ける。

その時、机の上のペン立てにあるカッターナイフが目に付いた。小刻みに震える手で、それを掴む。

カチカチカチカチ・・・・・

刃を出す音だけが部屋に響いた。

そつと自分の手首にあててみる。今まで堪えていた涙が溢れ出す。

私が死んだら・・・どうなるんだろう・・・

そんな考えが頭を過る。しかし、答えは見えていた。

どうにもならない。変わらない・・・何も・・・そう何も・・・

一つ、また一つと涙が零れる。

私は・・・最初から・・・存在していないようなものだもの・・・

歌夜は出来るだけ冷静に考えた。刃が血で染まる前に。今の状況をつくった原因を。

第一に自分のクラス。興味なき人々のために自分が死ぬことなど馬鹿馬鹿しく思えた。

歌夜はカッターの刃をしまった。

第二に解決方法。もちろん自分の感情のだ。そして、おかれた状況も。

しかし、自分一人では答えが見つからず、かといって相談にのってくれる相手もない。

それが第二の原因だつた。

歌夜は思い出す。今朝の夢を・・・。

暗き闇が、何処までも続き、道が無く、一步踏み出したところで目が覚める・・・。今朝見た夢は歌夜がおかれた状況、そして、これからを如実に表していた。

歌夜は机の上に置いてある小ビンを手にとった。中身は睡眠薬。歌夜は、それを大量に口にふくみ、無理矢理飲み込んだ。

視界がぼやけていく。歌夜は倒れるようにベットに横になり、深い眠りについた。

「そのまま田が覚めなければいいの……」

そんなことを思いながら……。

（第3夜 夢路）

目が覚めた時、そこには見知らぬ光景が広がっていた。

いや、知っていたのかもしれない。ずっと昔から、自分はそこにいた気がした。

枕元に手をやると、鈴のようなものが手に触れた。懐かしい感触。しかし、いつもどおりの気がする。

これで、舞を舞うんだつけ……？

その時だった。

「巫女様」。

外から声がした。歌夜を呼ぶ声。歌夜は簾を上げ、外に出た。目の前に小さな少女が立っていた。

「おはよう、沙苗。」

口から自然と言葉が出た。まるで自分の言葉ではないようだった。少女・・・沙苗から視線を逸らし、顔をあげて改めて周りを見渡した。そこには、とても美しいとは言えない光景が広がっていた。木々は枯れ果て、畠の土は水分を失いひび割れている。行き場を失った動物の死骸。不作のため着物の下から肋が見える村人達・・・。

「行こう。巫女様。‘龍神の滝’の舞台へ！」

歌夜は思い出した。そう、全ては雨乞いのために。この、悪しき状況を取り除くために。

歌夜は巫女としての一歩を踏み出した。

滝には、すでに舞台が用意され、村人達が集まり始めていた。歌夜は急いで禊を行つた。穢れを祓い、神聖な儀へと赴くために。歌夜は舞台へと上がつた。舞台の後ろは、水を失い滝とは言えない様な滝だった。

私は失つた水を取り戻すために・・・

「高天原に坐し坐して天と地に御働きを現し給う龍王は・・・」

歌夜は祝詞を唱え始めた。と、同時に神樂を舞う。鈴の音が静寂の中響きわたる。

「・・・龍王神なる尊みを敬いて・・・」

「これが私の『えられた役・・・』

「愚かなる心の数々を戒め給いて・・・」

これが私生きがい

「萬物の病災も立所に祓い清め給い・・・」

鈴の音と共に舞は激しさを増す。

「祈願奉ることの由をきこしめて・・・」

私は・・・私は・・・！

「六根の内に念じ申す大願を成就なさし給えと恐み恐み白す」

私はここに存在している！！

舞は終わり、静寂の中に鈴の余韻だけが残っていた。

（第4夜 人柱）

‘雨乞いの儀’を行つてから一週間が経つた。

が、一向に雨は降らず、それといった気配もなかつた。その間も、村人達の疲労や哀しみといった負の感情は日に日に増し、ピークに達していた。

その感情は巫女である歌夜に向けられた。歌夜は応じる。

「もし、後一週間程、雨が降らぬ場合は、別のかたちで儀を行いましょう。」

村人達の心には、既に一週間も待てる余裕は無くなつていた。

ある日、村人達は歌夜に内緒で密かに集まり、今後のことを話し合つた。

食料の事、年貢の事、土地の事、そして雨乞いの儀について。。。

「どうして巫女様が儀式を行つてくださつても雨が降らないのだろうか？」

「あれから、ますます日差しが強くなつてゐるよう見えますがな。。。」

「まさか、龍神様は巫女様を望んでおいでなのでは。。。」

「え・・・きつとそづじや！龍神様は巫女様を差し出すよう元氣でござられるのじやー！」

村人達は何かに突き動かされるよう、巫女を龍神に差し出すことを

決めた。

‘差し出す’、という事は、つまり、生け贋、にするという事だ。
そして次の日、村人達の仲の代表何人かが、歌夜に事情説明と説得
をしに行つた。たとえ説得に応じなくとも、村人達は歌夜を殺め、
生け贋にしようと決めていた。

*

「私に・・・贖となれ、ということですね・・・？」

「はっ・・・はい。そ・・・率直に申し上げますと・・・」

歌夜には分かつていた。

説得に来た村人の懷に短刀が仕込んであり、自分はどうちみち死な
なければならぬといふことが・・・。

ならば・・・

歌夜は目を閉じ深呼吸をすると立ち上がつた。

そして村人達に背を向け祭壇に向かつて歩き出した。

「巫女様・・・？」

祭壇に置いてある鏡の後ろから桐の細長い箱を取り出す。箱には何
重にも朱い糸が巻いてあつた。

その糸を、村人達が見守る中、無言で解いてゆく。
糸が解き終わり、歌夜は箱の蓋を開けた。

中に入っていたのは、立派な装飾を施した短刀だった。鞘には、菊、彼岸花といった模様がはいつていた。

「これは巫女が自害する時のみに使う短刀です。」

歌夜は背を向けたまま村人に語りかけた。

「はっ・・・はあ・・・それで返事の方は・・・」

村人の額には冷や汗が流れていた。

「承りました。」

歌夜は俯いたまま答えた。

この瞬間、歌夜が生け贅となることが決まった。否、最初から決まつていたのだが・・・。

「日は・・・?」

歌夜は顔をあげ落ち着いた声で問うた。

「今夜・・・、龍神の滝で。」

村人はそれだけ告げて帰つていった。

「これも皆のため・・・」

歌夜は自分の心中で思つていた事を声に出して言った。

しかし、心の奥底で、もう一つ別の感情が自分を突き動かしているのを歌夜は感じていた。

そして今、歌夜は龍神の滝にいる。歌夜の最期の舞台・・・。
村人が見守る中、歌夜は短刀を鞘から抜き、自分の喉に突きつけた。

ああ、私は・・・

短刀を思いきり自分の喉に突き刺す。生温かい血が自分の手を伝い、
赤い花となり地面にさく。遠ざかる意識の中、歌夜は思った。

私は・・・死を・・・望んでいたんだ・・・

こうして巫女としての歌夜は死んだ。

（第6夜 夢占）

「マダム・・・マダム・リデル・・・」

マダム・リデルこと、リデル・ブロワは誰かに呼ばれる声で目を覚ました。ショスターの途中で・・・。

「そろそろ店を開けましょう。」

「そうね、そうだったわね。」

リデルは木の看板を手に取った。

そこには見慣れぬ文字で、「占いの館 フロレアール」と書いてあつた。いや、いつも見慣れている文字だ。

その看板を使用人のジェームズに渡す。

リデルは夫が亡くなつてから13年間、この店をやつてている。星占術やタロットカードを使い、人の悩みを解決していく・・・それが彼女の仕事だつた。

ジェームズが館の扉を開けると、そこには既に黒山の人だかりが出来ていた。

「さあ、始めましょーか！！」

そう言つてリデルは気合を入れ直した。

1時半から始めた店は、閉める時には7時半をを過ぎていた。

リデルは来た人の悩みはその日のうちに聞くことにしていた。自分の時間を削つてでも人の役に立つことをリデルは生きがいにしていたのだ。

最後の客を見送り、扉の鍵を閉めたその時だつた。

ドンドンドンドン

激しく扉が叩かれる音は、尋常ではない。リデルは恐る恐る扉を開けた。

キイイイ・・・・・・

そこにはずぶ濡れの女が立っていた。外は雨が降り、雷鳴が轟いている。傘も差さずに来たのだろうか・・・。

「あ、中に入つて。」

リデルは女を中に招き入れ、ソファーに座らせ、タオルを渡した。テーブルの上にジエームズが温かい紅茶を置いた。女は震えている。よく見ると体中、寒だらけだった。

「貴女、名前は？」

女はちらりとジエームズの方を見た。

「ジエームズ、悪いけど席をはずして頂戴。」

女は人に聞かれたくない話があるらしい。ジエームズは無言で立ち去った。

「シルフィンといいます・・・。」

女・・・シルフィンはようやく口を開いた。

「実は、あることを口つてほしくて……口に参りましたの。」

貴族出身なのか、シルフィンの話し方はどうでも上品だった。

「夫を……どのよろこび殺したら良いでしょうか?」

（第7夜 悪夢）

「…………」

リデルは言葉を失つた。

やはり尋常ではなかつた……

そんなことを思つていた。

私は本気なんです。

シルフайнの目がそう訴えているように見えた。

「理由は何なの？」

リデルは出来る限り落ち着いた声で聞いた。
その声とは逆に背中には冷や汗が流れていった。

「夫に暴力をふるわれていますの。」

それは見れば一目瞭然だつた。痣だけではなく、服もとじれたり
破れている。

「酒癖が悪くて……それ以前に私の事が気に食わないらしくて……
」

「別れれば良いのでは……？」

リデルの問いに、シルフィンはため息をついた。

「それが出来れば苦労はしませんわ。」

そう言つてシルフィンは、また深いため息をついた。

「私と夫の結婚は家が決めた事でして・・・もし、別れでもしたら、私は家を追い出され、行く所が無くなってしまいますわ・・・。」

シルフィンはリデルを見つめた。哀しみを湛える・・・そんな目だつた。

「貴女の夫殺しを手伝うことは・・・出来ません。」

リデルは軽く目を閉じて言つた。彼女の目を見ることが出来なかつたのだ。

「ただ・・・貴女の夫の余命を占う事ならできます。・・・それだけでもよろしいでしょうか?」

シルフィンは頷いた。

リデルは早速、占いを始めた。

方法はタロットカード。手順に従いカードを並べていく。カードを3枚並べ、左から順にめくる。最後の1枚をめくり終えた時、リデルは目を見開き、悲鳴に近い声をあげた。

「いや・・・うそ・・・」んなはず・・・」

出たカードは‘運命の輪’の逆位置、‘恋人’の逆位置、‘死神’

の正位置。

「それで夫の余命は・・・？」

死神のカードを見ながらシルフィンが尋ねた。

「もう長くはないでしょ？・・・彼は運命により、貴女が手を出さずとも・・・」

「わかりましたわ。どうもありがとうございました。」

シルフィンは笑顔で扉を開けて出ていった。笑い声を上げながら・・・。その姿はまるで悪魔のようであった。

リデルはその姿を見送りながら、

私の余命も短いのでないか・・・

そんなことを考えていた。

その事を口う勇気は、今のリデルには無かつた。

この出来事から2週間後、原因不明の伝染病が流行し、それによりシルフィンの夫は命を落すこととなる。

（第8夜 原因）

‘原因不明’、といつて言葉は人々の心に恐怖と不安を生み出す。原因がわからないということは、解決策も無いということ。何も出来ず、解決策も見つからないまま伝染病は日に日に広がつていった。

人々は原因を求め、恐怖から原因をでつちあげた。

これは悪魔の仕業だ！！

そして、目に見えぬ悪魔は、後に目に見えるものとなつた。人々はそれの名を、‘魔女’、と呼んだ。

原因不明の伝染病に終止符を打つため、その矛先は魔女に一番近しい、女性に向けられた。

中でも占い師は、魔女の中で重要な位置にいるとされ、国中の占い師が捕まり拷問で自白を要求され処刑された。

やがて拷問は廃止されたが、無理矢理、自白を要求し処刑する方法は変わらなかつた。

狭い部屋で魔女か否かの取調べは行われていた。

その部屋に続く廊下には、‘魔女’、と呼ばれた人々が“裁きの時”を待つていた。当然、その中にはリデルもいた。また一人、また一人と部屋に呼ばれ裁かれていく。誰も戻つてこないところを見ると、皆、処刑される運命なのだろう。

リデルの前の人人が部屋に呼ばれ席を立つた。彼女は俯いたまま、静かに部屋に入つていった。

パタン・・・

扉の閉まる音だけが狭い廊下に響く。部屋の中から話し声が聞こえた。

「名前は？」

「リア・ドロシーです。」

「神は信じますか？」

「……いいえ。」

「ほつ、信じない？ 貴女は悪魔に魂を売った人間ですね？」

「いいえ！ そんなことありません！ ！」

「嘘をつきましたね？ 神を信じているのなら最初の質問で、はい、
と言つでしょ？」

「でも……私は……」

「第一、神の元にあるのなら嘘はつけないはず……つまり貴女は
魔女ですね？」

「……はい。」

彼女は何を言つても無駄だと、聞き入れてもうえないと思つたのか
魔女であることを認めた。
いや、認めざるおえなかつたと言つた方が正しいだろ。

「ならば生きしておく訳にはいけません。」

彼女はすぐに火あぶりの刑を命じられ、処刑台のある広場に連れて行かれた。

（第9夜 介入）

「この後、リデルも部屋に呼ばれ、理不尽な取調べが行われた。取調べを行っていたのは神父だった。

「貴女は神を信じていますか？」

「……はい。」

「では神と対なる悪魔の存在も信じるのですね？」

「いいえ。」

「……という事は神の存在を否定しているのも同じ。」

「そんな……！それは違います！」

「もはや言い訳は無用……貴女は13年前、夫を殺しその魂と引き換えに悪魔から‘力’を貰った。そして占い師と言う立場を利用してシルフイン夫人の夫を殺し、新たな力を手に入れようとした……これは事実です。」

「嘘です！！私はそんな事していません！断じてそんな事は……！」

「言い訳は無用と言つたはずです。火あぶりの刑に処します。おい、お前たち、この魔女を連行しろ！」

「神父は強引にリデルを魔女にし、処刑を命じた。」

リデルは広場に連れて行かれ木製の十字架に掛けられた。

足元には油のかかった木材が積んであった。同じように十字架に掛けられた人は、およそ40人・・・その一人一人に松明を持った神父がつく。

一人の神父が右手を挙げた。それを合図に神父たちが一斉に点火する・・・その時だった。

「そこまでよ！――」

全ての時が止まつた。

リデルは顔をあげた。静寂の中に響くその声は力強く、リデルからすれば異国の言葉であつたが、リデルは何故か懐かしささえ感じていた。

「迎えに来たわ・・・四条歌夜！――」

（第10夜 浮世）

歌夜の異変に最初に気づいたのは母だった。

夕食時、部屋のドアをノックし、声をかけたが、返事が無い。嫌な予感がする。

母はスペアキーを使って恐る恐る部屋に入った。

電気もついておらず部屋の中は暗い。母は電気をつけ、そして驚愕した。目の前には、散乱した睡眠薬、横たわり深い眠りについた自分の娘・・・。

母は慌てて駆け寄り歌夜を抱え起こし、何回も名前を呼んだ。だが返事は無い。・・・が、脈はあるし、呼吸もしている。歌夜はすぐに病院に運ばれた。

歌夜はそれから、その病院で1年間眠り続けた。

その間、歌夜の色々な検査が行われた。しかし、どこにも異常は無い。ただ眠り続けているだけ。いつ目覚めるかは、分からぬ。それが結果だった。

母は精神を病んでしまい、夫を殺して自殺してしまった。

引き取り手の無い歌夜は、山奥の研究所に移され、そこで更に2年間眠り続けた。

歌夜が眠り始めてから、今日でちょうど3年目。この日、研究所に一人の少女がやってきた。

髪は短く、背は低いが、15～16歳くらいの年格好である。研究所の廊下を歩く少女に一人の研究員が声をかけた。

「お待ちしていました。夢見沢弥姫さんですよね？」

「ええ・・・貴方が連絡をくれた山下聰さんですか？」

「はい。例の少女はこっちです。」

二人は廊下を曲がり、少女のいる部屋に向かった。扉の前に立つた、その時・・・

来ナイデ・・・邪魔シナイデ・・・

弥娜の頭の中に強烈な念波が伝わってきた。弥娜はその場に手をついた。

「大丈夫ですか？！」

山下は突然のこと驚いた様子だった。

「大丈夫です。少し立ちくらみがしただけですから。」

弥娜は心配する山下をよそに自らの手で扉を開けた。
部屋の中には、弥娜が今まで見たことも無い機械や大量の書類だった。

そして部屋の中心の天蓋付きのベットに例の少女は眠っていた。

「この人が・・・四条歌夜？」

「ええ、そうです。」

答えたのは女性だった。気がつくと、その女性は弥娜の後ろに立っていた。

「申し遅れました・・・私がこここの研究長のゾフィー・ウイリアムで

す。
」

「夢見沢弥娜です。宜しくお願ひします。」

弥娜は軽く頭を下げる。そのまま横田で歌夜を見る。歌夜はしきりに寝返りをうつたところだった。

（第11夜 研究）

弥娜は更に奥の部屋に通された。そこは、小さな応接間だった。席につくなり、ゾフィーに写真を渡された。
そこに写っていたのは、真っ赤な雨の降る中で、首から血を流しながら眠る歌夜の写真だった。

「これは……？」

「この研究所で撮影されたものです。」

ゾフィーは落ち着いた声で言つたが、弥娜にはとても信じられなかつた。

「室内なのに何故、雨が……それに、首から出血なんて普通なら……」

「一種のポルターガイストです。」

「えつ？」

ますます信じられなかつた驚きの表情を浮かべる弥娜をよそにゾフィーはさりげに説明を続けた。

「これは見たとおりただの雨ではありません。」

「まさか……血ですか？」

「その通りです。この写真は今から一年前に撮影されたのです。」

この血は約一日降り続けました。それに、首から流れている血もポルターガイストです。彼女はあの通り生きていますから。」

「あの・・・他にもあつたんですか?」こういった現象が・・・

「ええ、この一日後、研究所内に今度は普通の雨が降り続け水びだしになりました。だから貴女を呼んだんです。」

ゾフィーは今よりも更に真剣な目つきで話を続けた。研究に全てを捧げる、そんな人の目だった。

「このポルターガイストは夢から来るものだというのが私たちの推測です。」

「つまり・・・それは・・・」

「そうです。貴女の“夢に潜る力”が必要なんですね。」

「・・・」

（第12夜 決断）

弥娜の家、夢見沢一族は代々、「夢占」や「予知夢」、「夢潜り」などを行い影ながら人々を支えてきた。

一族には昔からの継がある。それは“自ら名のるべからず、必要とされしとき赴け”というものだった。

普段は普通の人々と同じ生活を送り、必要となつた時は人々のために動けという意味だ。

しかし、ここ何十年も“夢見の力”は必要とされていなかつた。弥娜にとって、この科学技術の発達した時代に自分が必要とされるなど、覚悟はしていたが、意外なことだつた。

「貴女に夢に潜つてもらい、どんな夢を見ているか、見てきてもらいたいんです。もしかしたら眠り続ける原因がわかるかも知れない。」

「でも・・・彼女はそれを嫌がつてゐるんですよ？」

「何ですつて？！」

「『』に来た時、『来ナイデ・・・邪魔シナイデ・・・』っていう念波が伝わってきて・・・」

その時、応接間の扉が勢いよく開いた。そして、弥娜のみたことの無い男性が入ってきた。

「だつたら、夢を壊しちまえばいいんじやねえのか？」

「岩乃・・・聞いていたの？」

「ああ。彼女は夢の中に誰かが入つてくるのを嫌がってる。だつたら、その小娘が彼女の夢に潜つて、彼女の夢を壊せばショックで田覚めるだらうよ。」

岩乃とよばれた男は弥娜を睨みながらそう言った。

「夢を壊すなど、一族の掟に反します！――」

弥娜も負けではないかった。岩乃を強く睨み返す。

「ふん。田覚めるならいいだらうが。ケツ、これだからガキは。」

「やめなさい、岩乃。でないと・・・」

「はいはい。研究長。分かりましたよ。でないと、クビにされちゃいますからね。」

そう言つて岩乃は部屋を出ていった。

「「あんなさいね・・・でも私たちは、貴女の一派の掟に反する事をさせんつもりは無いわ。」

ゾフィイは優しく弥娜の肩をたたいた。

「どう？協力してくれるかしら？」

弥娜は「クンと頷いた。弥娜の目にまだ、不安の色が浮かんでいた。

「今日は、潜れるかしら？」

「いえ。今日はちょっと・・・無理です。明日なら・・・。それに弟が待つてると思つんで今日は帰らせてもらえないですか？」

（第13夜 異常）

弥娜はホテルの一室に居た。このホテルは研究所が手配してくれたものだ。それなりに高級な部屋であるが、代金は研究所が負担している。

弥娜はベットに座り、そして、ため息をついた。

不便な暮らしだけではあるのだが、弥娜は何かが満たされていなかつた。

「姉ちゃん……どうしたの？」

「尚樹……」

浮かない顔の弥娜に、弟の尚樹が声をかけた。

尚樹は、まだ小学五年生である。そして、夢見の力、を持つていなければ。

本来、「夢見の力」というものは夢見沢一族の女ののみが継承するものであり、男にはその力は与えられないのだ。

「何でもないの……大丈夫。」

心配そうな顔をする尚樹の頭を撫でながら弥娜は答えた。

「姉ちゃん、いつもそうやって無理するんだから。俺に隠さなくてもいい・・・言つてくれよ！俺も姉ちゃんの力になりたいんだよ！」

目を涙で潤ませながら自分を心配してくれる尚樹を弥娜は優しく抱きしめた。

「尚樹は・・・友達とか先生とかと離れひきつて寂しい?」

「うん・・・少しだけ・・・」

「帰りたい?」

「ううん。姉ちゃんが一緒にいなきゃ嫌だ。」

「それは無理よ・・・。」

「じゃあ俺もここに残る。」

尚樹の返答を聞くたびに、弥娜の目も潤んでいった。

「私は・・・私はね尚樹が幸せならそれでいいの。」

「俺も姉ちゃんが幸せならそれでいい。だから・・・そんな悲しそうな顔はしないでほしいんだ。」

「・・・」めんね。心配かけちゃって・・・

弥娜は笑顔でこたえてみせた。尚樹は少し安心したようだった。

・・・と、その時、弥娜の携帯電話が鳴った。

「はい、もしもし。」

「弥娜さんですか?山下です。」

電話のむこうの口は慌てている様子だった。

「どうかしたんですか？」

「それが、またポルターガイストなんですねー。」

「……。」

「歌夜の体の周りの気温が異常に高くて……それに煙もー。」

「煙?ー。」

「ですから、すぐ来て夢に潜つてもらいたいんですねー。」

「わかりました……。すぐに行きます。」

そう言つて弥娜は電話をきつた。すぐに支度を始める。

「姉ちやん……。」

「大丈夫。すぐに戻るから。」

心配する尚樹を残し、弥娜は部屋を後にした。

「失礼します。」

「弥娜さん・・・早くー！」から歌夜の傍にいけます！」

研究所に着いた時、その室内は、山下の言つとおり異常といえるほど気温が高かつた。おまけに辺り一面、煙が充満し前が見えない状態だつた。

そんな中、山下に手を引かれ弥娜は歌夜の傍までやつてきた。そこには既にゾフイが立つていた。

「良かつた。来てくれたのね。今、夢に潜ればボルターガイストの原因も分かるかもしねー！弥娜さんも潜つて頂戴！」

弥娜はゾフイに言われるままに、夢に潜るため歌夜の手を両手でしつかりと握り目を閉じた・・・。

*

目を開けた時、風景は異国の石造りの広場に変わっていた。何故かその広場にはたくさん的人が集まっていた。

しかし誰も突然現れた弥娜の事を気にしている者は居なかつた。試しに人の顔の前に手を出してヒラヒラと振つてみたが、なんの反応も示さない。

ふうん。見えてないんだ

その時、人々が急にざわめき始めた。皆、広場の中心を見ている。

弥娜もつられて、その方向を見た。

そこには十字架に掛けられた十数人の女性と松明を持った神父らしき人がいた。その中で、十字架に掛けられた一人の女性が他の人と違う光を放っている様に弥娜には見えた。

まさか・・・あの人があ・・・

一人の神父が手を挙げ、松明の火が十字架に掛けられた人の足元にある木材に点火される瞬間、弥娜はその女性と目が合った。

あの人は私が見えてる・・・だつたら!!

「そこまでよ!!!」

全ての時が止まつた。

「迎えに来たわ・・・四条歌夜!!!!」

「わ・・・私?わたしを・・・?」

彼女が言葉を発した瞬間、周りの風景にヒビが入り、硝子のように砕け散つた。

そして暗闇の中に弥娜とその女性だけが残された。

「わたし・・・“力ヨ”っていう名前なの?・・・」
「はど・・・
ウツ!」

何処からか飛んできたナイフが弥娜の横をすり抜け、女性の胸を貫いた。そして女性も硝子のように砕け散つた。

一人残された弥娜の後ろで足音がした。

「言つたはずよね・・・“邪魔シナイデ・・・”つて・・・」

その足音は少しずつ弥娜の方へ近づいてきた。

（第15夜 邂逅）

「誰？貴女は誰なの？」

目の前に現れたのは巫女装束を纏つた少女だった。

「私は伽代……歌夜の心から生まれし“力ヨ”の一人。」

「どういふこと……貴女は歌夜じゃないの？」

「私は歌夜であつて歌夜でなきもの。歌夜の理想の実体化。伽代の名を借りし一つの存在。」

伽代と名乗った少女は淡々と答えた。弥娜は背筋に寒気を感じた。

「何故、今の人を殺したの？」

「それは“力ヨ”たち全ての望み、掟。貴女の一族にも掟があるようにな……。」

「なぜ……なぜ知ってるの……？」

「貴女の名は夢見沢弥娜。夢への介入者でしょ？眠っていても私は全て見えてるわ。歌夜が今、研究所に居る事も、両親が死んだ事も……私の世界を壊そうとする人がいることもね！」

「…………」

「貴女は介入するだけで人の世界を壊さないって分かってるわ。だから今のところ危害は加えない。でも私はこの世界で生きてるの。だから邪魔しないで。また介入するつもりならあの男のようになるわよ？」

「それってどういって……」

弥娜はその瞬間、意識が遠のき、夢から追い出された。

*

「弥娜さん一起きて！…弥娜さん！…！」

ゾフィーに呼ばれて目を覚ました。充満していた煙は跡形もなく消え、気温も、いつもの研究所に戻っていた。

「私…何分くらいこつしていたんですか？」

「30分くらいですよ。」

弥娜の質問に傍に居る山下が答える。

「何か分かりました？」

「はい。彼女は彼女の理想のカタチで何人も存在していて…皆、死を願つてるんですよ。眠つても周りは見えてるって言つてました。私が来るのも分かつていていたみたいで…」

「彼女と会話したの？！他になんて？」

「もう介入してくるなと・・・介入すればあの男のようになるって・
・」

「あの男・・・？」

と、その時・・・

「研究長！大変です！」若乃さんが！――

その後、ゾフィイの秘書二ーナが告げたのは、若乃の死だった。

（第16夜 境界）

岩乃是屋上から転落して死んだらしい。屋上にあるフェンスは岩乃が転落した所だけ何故か変形していた。岩乃がやつたのだろうか・・・いや、一人の人間が出来るものではない。もつと他の何かが・・・。

そのフェンスの傍にはタバコの吸殻が落ちていた。その事と、岩乃の性格からして自殺というのは考えられない。

やつぱり歌夜が・・・？

その後、一人ホテルに戻った弥娜は色々と考え、そして悩んでいた。ゾフィにはもう一度、夢に潜つてほしいと頼まれたが、死者が出ている為に、自分や弟に被害が及ぶ可能性もある。尚樹の安らかな寝顔を見て、弥娜は、ため息をついた。その時、

「お姉ちゃん・・・」

尚樹が弥娜の名前を呼んだ。寝言だと思いながら弥娜はもう一度、尚樹の顔を見た。それは確かに寝言だったが、どこか様子が変だ。尚樹は寝たまま、更に喋り続けた。

「嫌がつてゐるから・・・潜つちゃいけない・・・やめて・・・」

「尚樹・・・？」

「何を悩んでいるの？潜らないでと・・・言つたはずよね？」

弥娜の背後で声がした。弥娜が振り向くと、そこには、あの時出会った少女が立っていた。

「伽代なの……？イ……ヤ……駄目！弟には……尚樹には手を出さないで……！」

伽代は首を横に振った。

「私じゃないわ……多分、華世がやつてるのよ。私は様子を見に来ただけだもの……。」

「華……世……？だつたら止めてよーやめさせとーーー。」

「無理よ。それは歌夜自信の意志だもの。」

「そんな……でも貴女は……。」

「……ただ、一つだけ方法があるわ。その子の夢に潜るのよ。」

伽代の口から、「夢に潜る」という言葉を聞くのは弥娜にとって意外な事だった。それでも弥娜は弟を助けるために弟の手を握った。夢に潜りうとした時、伽代が弥娜に声をかけた。

「その子の夢は今、歌夜とつながっているわ。だから私も簡単に来れた。それと華世は、甘くないわ。油断しない事ね。」

「何故……貴女は私に色々な事を教えてくれるの？貴女は……。」

「さあ、何ででしょうね。でも歌夜は……貴女の事を……。」

そう言って伽代は消えた。まるで何か別の力に焼き消された様だった。そして、弥娜も引きずり込まれる様に尚樹の夢に潜つていった。

(第17夜 修羅)

弥娜が目を開けた時、足元には無数の死体が散らばっていた。
そして、その中心に一人の女性が佇んでいた。着物は返り血を浴び
紅く染まり、手には一本の日本刀を持っている。

「来たわね・・・。」

その女性は弥娜を見詰め微笑んだ。

「華世ね・・・弟は何処?」

「貴女の足元よ。」

弥娜の足元には尚樹の死体が転がっていた。

「尚樹!-!-」

「死んでないわ・・・現実ではね。でも精神崩壊くらいは起こして
るかも。」

華世は嬉しそうに、また微笑んだ。

「まさか・・・岩乃さんも、貴女が・・・」

「嫌ねえ。人聞きの悪い。大きな負の感情を持つ人間は、時として
靈的力を發揮する事があるの。私はただ、その人の後押ししただけ
よ?」

「負の感情を持つ人間・・・？」

弥娜の様子をみて笑う華世を弥娜も負けじと睨んだ。

「うふふ・・・私が憎いの？」

華世は持っていた日本刀の片方を弥娜に投げ渡した。

「だったら私を殺しなさい。どうせ私は死ななければならぬのだ。いつもは自分で自分を殺してきたけど・・・他人に殺させるのも面白いわよねえ。」

そう言うと華世は刀を突き立てて弥娜に向かって襲いかかってきた。弥娜はとっさに刀をかざし受け止めた。

「貴女は・・・何が目的なの？」

「目的？私が死ぬこと。または貴女を殺すこと・・・私はどちらに転んでも構わない！！」

華世は様々な方向か角度を変えて襲いかかつてきた。華世が持つ鉄の刃が幾度となく弥娜の肌を紅く染めた。それでも弥娜は必死に避けた。

死にたくない。もちろん殺したくもない。

「アハハハハ！楽しいわね！そんなに死にたい？殺らなきゃ殺られるのよ？私はまだ掠り傷一つ無いわよー！」

それでも弥娜は刀を華世に向けようとはしなかった。

否、向かはれなかつたのだ。今の弥娜は避けるのが精一杯であり、攻撃する余裕など、どこにも無かつた。
殺らなければ殺られる、結局それが現実であった。

イチかバチか・・・

弥娜は向かつて来る華世にむけて刀を翳し目を閉じた。鈍い音と共に弥娜の手が紅く染まつた。華世の血だ。弥娜はそつと目あけた。華世の姿は何処にも無く、周りの景色も無くなり闇が広がつていた。
そこに残されたのは、弥娜と、尚樹と、もう一人・・・

（第18夜 真実）

「伽代……」

そこには伽代が立っていた。悲しそうな顔で尚樹を見詰めている。

「じめんなさい……私の妹のせい……」

「妹？貴女は何者なの？」

「私は伽代。歌夜より先に生まれて先に消え、歌夜の中に存在する靈魂……。」

*

今から22年前

伽代は四条家の長女として生まれた。母は伽代を溺愛していたが、伽代は3歳で交通事故に遭い死んでしまった。

その翌年に生まれた子に母は伽代と同じ響きを持つ名をつけた。これが歌夜である。

母は歌夜を呼ぶたびに伽代を思い出し哀しんだ。

その結果、伽代の靈魂は、この世から離れられず、さ迷い続けた。また、歌夜はそんな母を見て育つたため愛情を感じる事が出来ず、常に寂しさと孤独の中に居た。

歌夜は幼い頃から日常に満足できず、そのまま17歳まで育ち、あ

の日から長い眠りについた。

歌夜は夢の中で生と死を繰り返し、生きる意味を掴もうとしていた。そして、そのために生み出した最初のもう一人の自分が伽代である。自分でもあり憎き姉でもある‘伽代’。

歌夜は伽代を殺し、自分の中から消し去りたが、それが逆効果だった。伽代という名は、この世をさ迷っていた伽代を捕え、伽代を歌夜の夢の中に封じ込めてしまったのだ。

その後、弥娜が夢に介入してきた。伽代は妹を庇い弥娜を夢から追い出していたが、弥娜に敵意が無い事を知り、妹の為にも状況の改善を望み、弥娜に協力するよくなつたのだった・・・

*

「そんな・・・歌夜の姉だなんて・・・」

「信じられないかもしけないけど私の精神は夢の中の伽代と融合し成長しているのも事実よ。」

尚樹が苦しそうに弥娜の名前を呼んだ。生きている。

「その子を貴女の実家に送りなさい。貴女のおばあさまなら何とか出来るかも・・・」

弥娜は頷いた。

「一つだけ教えて。何故、貴女は私の事を色々と知ってるの？私の・・・」

伽代の姿が消えた。

「それは・・・全ての、夢、は繋がっているから・・・。」

頭上から聞こえてくる声はとても優しかった。安心を齎す声・・・。
しかし嵐の前の静けさの様な・・・。

「お姉ちゃん・・・」

もう一度、尚樹が弥娜を呼んだ。

（第19夜 忘却）

「お姉ちゃん……」

目が覚めた時、尚樹は祖母の家にいた。悲しい夢を見ていた。姉が自分を助けてくれて、彼女はそれと引き換えに命を落とす・・・考えたくないような夢だった。

あれ？

姉の顔が思い出せない。姉の声も。はたして自分に姉などいたのだろうか・・・そんな気持ちになる。

「目が覚めましたか・・・尚樹。」

祖母が部屋に入ってきた。

「ねえ、俺は何でここにいるの？」

「友達と遊んでいて貧血で倒れて、ここに運ばれたんです。」

何かが違う気がした。しかし、何が違うのか自分でも分からぬ。

「お姉ちゃんは？」

それを聞いて祖母はクスッと笑った。

「何を寝ぼけているんです。尚樹は一人っ子でしょう。」

ただの夢か・・・

祖母に言われたら認めざる負えない。そり、全てはただの夢だったのだ。

「昼食が出来てこますから起きて食べなさい。」

「うん。」

今までの事など忘れ、尚樹は廊下を走っていった。その姿を祖母は悲しそうに見つめ涙を流した。

「姉の事など忘れて幸せに暮らしなさい・・・。貴方の姉は・・・もつすべ・・・」

==研究所==

「それで・・・姉がいたなんて初耳ね？」

「はい。」

「そう・・・姉がいたなんて初耳ね。」

ゾフイはやうやくため息をついた。自分の調査不足に対してもだ。

窓の外を見るゾフィーの目は何故か悲しそうで・・・まるで何かに怯えていたようだった。

「今日はもう部屋に戻りなさい。貴女も疲れてるだろうし・・・私も・・・ね。」

部屋から出て行く弥娜を見送り、ゾフィーは一人部屋に残つて窓の外を見た。

「貴女を見ていると不安でならないのよ・・・」

（第20夜 焦燥）

ゾフィーは、焦っていた。

研究の成果だつて、もうすぐ出そうなのに、あんな事を誰かに知られるなんて考えたくなかつた。彼女の能力は正直恐ろしかつた。このままではバレるかもしねい、いつもそんな事を考えていた。

*

煙草を吸いながら屋上に居る岩乃。フーンスに寄りかかつて此方を見ている・・・

「なあ、研究長・・・やつぱりあの子の夢をぶち壊して早々とこの研究を終わりにした方がいいんじゃないツスか？」

「何を言つてゐるの？彼女の一派の撻に反するでしょ？」

それを聞いて岩乃是ニヤリと笑つた。

「研究長・・・本当はあのガキの撻やつ向やつせびでひこいんでしょ？」

「なつ・・・何を言つてゐるの?」

「アンタは自分の研究の事しか考えてない・・・違つか?だつて、
そうだろ。あんな危険な現象が起きてるのに、この期に及んで人を
呼ぶか?普通。」

「・・・・・・・・・・」

「それとも、これを期にあの一族の研究もするつもりか?」

「・・・・黙りなさい。」

「結局、研究第一つてことなんじやねえのか?」

「黙れ! ! !」

ゾフィイの発した言葉は、何故か大きな力となつてフェンスを捻じ曲
げた。バランスを崩し落下しそうになる岩乃。それでも、落ちまい
と必死にしがみついていた。

「うわああああ!」

「そうね・・・確かに私は研究の事しか考えてないわ。だけど、そ
れが何?」

ゾフィイの後ろに、あの少女が立っていた気がしたが、岩乃の思考は
長くは持たなかつた。

ズルツ

落下する岩乃。下から微かに声が聞こえた。

「あのガキも用が済んだら俺みたいにするのかよ・・・研究長・・・

」

思い出したくもない忌まわしい過去。だけど彼女の能力は私の過去をも暴くかもしれない。

出来れば、研究が終わつたと同時に彼女には、岩乃の様な不幸な事故で死んでほしかった・・・

*

（第21夜 崩壊）

尚樹が去つてから弥娜は研究所の一室を『えられ、そこで生活をするようになった。

狭くて殺風景な部屋には生活に必要最低限の物しか置いていない。弥娜はベットに腰かけ、ため息をついた。

足りない・・・

部屋の中を見て弥娜はそう思つた。弥娜にとって一番必要で、大切な存在である尚樹はもうここにはいない。唯一の心の支えである尚樹が居ない今、弥娜の心にはポツカリと穴が開いたように、物足りないと感じる様になつていた。

歌夜はどのくらい深い絶望の中にいたんだろう・・・

ふと、そんな事を考えながら弥娜は眠りについた。

*

「姉さん・・・居たの・・・？」

「ええ。」

「なぜ・・・何故、私の中に?けし・・・消したはずなのに・・・イ・・・イヤ・・・・」

「・・・・・」

「イヤツ・・・幻よ・・・」・・・これは・・・

ザンツ！――

景色が赤く染まつた。

*

「――――」

血なまぐさい夢を見て弥娜は目が覚めた。暗い部屋の中を時計の弱々しい光が照らしている。それでも部屋の中は暗い。時計は午前2時をさしていた。弥娜は枕元に手をのばした。

たしか、この辺に水さしとコップが・・・

パシッ

突然、誰かに手を掴まれた。突然なことなので声も出ない。

「どう？ 独りになつた気分は？」

そこには1人の少女が立つていた。

年は5～6才くらいで、背は低く白いワンピースを着ている。何故かこの暗闇でその姿ははつきり見えた。

生靈・・・なの？

「貴女は・・・？」

「私はね、花_ヒつていうの。どう?孤独の中にいる気分は・・・変える場所を失う気分は?あはつ」

「どうこう事・・・?」

花_ヒつは弥娜の腕を思いつきり引張った。

「何にも知らないのね。みせてあげるわ。」

（第22夜 記憶）

目の前には見慣れた光景が広がっていた。見慣れた部屋。

「こゝは・・・おばあちゃんの家？」

その部屋には一人の少年が寝ていた。
隣には祖母が座っている。

尚樹！！！

祖母は尚樹の額に手をあてた。

「夢見沢尚樹には夢見沢弥娜などという姉の存在は無い。全ては夢、
幻。」

あ・・・あれは・・・

「夢見沢尚樹には姉と過ごした記憶など一切無い。」

「言靈の実体化！？」

言った言葉を現実にするのが、言靈の実体化、である。この術から抜け出すのは同じ術者でも難しい。ましてや一般人では・・・。

その後、尚樹は姉の事など、その存在すら忘れ、部屋から出ていった。

「そ・・・ん・・・な・・・。」

弥娜の目から涙が溢れた。

「まだだよ……。これだけじゃないんだからね」

*

無の中に一人の少女が立っていた。同じ顔、同じ髪型。

「姉さん……居たの？私の……私だけの世界に。」

「ええ。」

「何故なの！四条伽代はとうべ死んでるじゃない！――！」

「そうね。」

「なぜ……何故、私の中に？けし……消したはずなのに……
イ・・・イヤ・・・・」

「・・・・・・・。」

「消したわ……」んなの嘘よ……。」

「嘘じやないわ。貴女は常に誰かを求『つむせ』……。』

「イヤ……嫌なの……自分以外の世界なんて……誰も……

「その思ひそ嘘なのよ……。」

「イヤッ・・・幻よ・・・」・・・これは・・・」

ザンッ！――

景色が赤く染まり、二人の姿が消えた。

*

「分かつたかな？貴女は独りなんだよ？」

弥娜はその場にガクリと膝をついた。目から涙が溢れ、零れ落ちる。そんな弥娜を見下ろしながら花与はさらに追い討ちをかけるかのように言葉を続けた。

「世界は冷たいの・・・。私たちを簡単に捨てるわ。信じていいのは自分だけよ・・・?」

「・・・」

「貴女も眠りなさい。闇の中で、自分だけの世界で生きるといいわ。」

「私は・・・」

「?」

「私は確かに独りかもしれない・・・けど、私は世界に捨てられても、私は世界を捨てない!!!!」

「私が世界を捨てたんじゃない、世界が私を捨てたのよ・・・。」

花与の顔には怒りと、そして悲しみが表れていた。

「貴女も私も同じ立場・・・だったら貴女が目覚めてくれたら、私は独りではなくなるのに。」

弥娜の言葉に花与の表情に困惑の色が表れた。

「何故・・・？貴女といい姉といい何故なの？私を捨てた世界の一部のくせにーーー！」

「夢か・・・」

弥娜は目覚まし時計の音で目を覚ました。あわてて時計を止める。ふと、手首に目をやると花与が掴んだ痕がくっきりと残っていた。

深い闇の中に花与の死体があつた。生まれては死ななければならぬ世の理。

花与の死体の側に一人の少女が立つていた。

17歳。四条歌夜。学生服を身に纏い、眠りについた時のまま。歌夜はそつと花与の死体を抱き上げ、そして抱きしめた。

「結局・・・生と死を繰り返しても何も・・・生きる意味は分から

*

なかつた・・・

花との死体が手の中で消える。

「自分だけの世界は自分だけ・・・独りだもの。」

歌夜の足元には今までの“カヨ”達の死体が転がっていた。

「外の世界に出るのは辛いわ。けど・・・あの子なら信じていいかも・・・だから私は・・・。」

突然、歌夜の表情が変わった。

「人は裏切るのよ・・・信じていいのかしら？それに今さら外に出るなんて私のプライドが許さない！！」

もう一人のカヨ。歌夜は心の奥底から自分の望まないカタチでもう一人の自分を生み出してしまった。

・・・つまり歌夜は深い眠りの中で二重人格になってしまったのだ。

「死をもつて生きる意味を知りたいなんて・・・莫迦ね。」

もう一人のカヨは声をあげて笑った。

「私の邪魔をするなら、私自身でも許さない。」

カヨは手を上げ思い切り振り下ろした。

「消えなさい、誰もかれも！..」

暗闇にヒビが入り、歌夜の世界が崩れはじめた。

～最終夜 希望～

一方その頃研究所は揺れていた。壁や天井が崩れる中、ゾフィイは早く研究所から逃げ出していた。

研究は大事だか、命の方が大切だ。必要な書類だけを持ち、仲間を捨て、研究所から脱出する。

ゾフィイにとつて仲間などは二の次の存在でしかなく、研究の方が・・・即ち自分の利益が一番なのだ。

自分より研究の成果をあげていた弥娜は研究に必要な道具でしかなかつた。

しかし、憎かつた。自分より年下の、ただの小娘が研究の成果をあげているなど認めたくなかったし、許せなかつた。だからこそ見捨ててきたのだ。彼女を殺して手柄は自分のものにしようと・・・。そんなゾフィイに聖裁を下すように、玄関の柱が折れ、ゾフィイの上に倒れてきた・・・

*

研究所内はパニック状態だつた。立つていられない程の揺れ、逃げ出すのに精一杯な状況だつた。周りの人人が次々に逃げ出す中、弥娜は一人、歌夜の傍に近寄つた。

「私は、見捨てないから。」

歌夜を連れて逃げようと思い、その手に触れた時、歌夜がうつすらと目を開け弥娜を見つめた。

「歌夜……？」

「あなたは……あなたは逃げないの？」

歌夜の間に弥娜は「クンと頷いた。

「うん。一緒に生きやいやだ。」

次の瞬間天井や壁が零れ落ちた。と、同時に歌夜の表情が豹変した。逃げられない状況になってしまった。

「有難う……」

「裏切らず、ずっと一緒に居てくれる？」

もう一人の力ヨ。

弥娜は歌夜の手をギュッと握った。

「私は裏切らないし、どんな“歌夜”も受け入れる……。だから・
・・だから、ずっと一緒にいようね・・・」

歌夜の表情が笑顔に変わる。その直後、天井が崩れ一人の上に落ちてきた・・・

*

「お姉ちゃん?」

遠く離れたところで、居る筈のない姉を尚樹が呼んだ・・・。

END

～最終夜 希望～（後書き）

あとがき

いかがだったでしょうか？

よつシリアスに、高度な展開を垣籠してみたんですが。

授業中に仕上げるという荒業をやつたにも関わらず、自分では結構気に入っています、この作品は。

ラストを、あえてあのよつなオチにしたのはそれなりの理由があります。

続きを読む者に考えて欲しいからです。

あのまま血口の中で完結させてもよし。
あるいは、尚樹のその後とか考えてみても楽しめるんじゃないでしょうか？

結末は一つでなくともいいんです。

納得がいくも、いかずも貴方次第。

私としては納得いかないままモヤモヤと心ごどじまつ続けてくれれば嬉しいのですが（笑）

最後までこの作品を読んでください有難いございました。
評価の方をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721c/>

夢見姫 墮落の少女

2010年11月14日09時41分発行